

# 京極読書新聞 <第68号>

発行日 平成27年 6月1日(月)  
京極町生涯学習センター湧学館

## 京中生に インタビュー 2015 第1回

今の中学生たちは、どんな本を読んでいるのだろうか？  
さあ、今年度の「京中生にインタビュー」のはじまりです。  
<編集部>

### グライナー オリビア 咲さん(1年)「チームふたり」 佐古岡 駿くん(2年)「バンクーバーの朝日」

———中学校の新しい生活、どうですか？

グライナー 生徒の少ない南京極小学校から来たので、人がいっぱいいる教室にはびっくりしましたけれど、今はもう大丈夫です。部活動も先輩たちがやさしいので楽しいです。

———どの部活に入ったの？

グライナー バドミントンです。

———卓球のダブルスは、テニスやバドミンソンのダブルスとちがう…ということ、この「チームふたり」を読んで初めて知りました。

グライナー ダブルスは、もう個人競技ではなく「チーム」なのですね。私も主人公・大地と純のダブルスが少しずつ「チーム」意識に目覚めて行く話の流れがとても心に残りました。

———その目覚めて行く転回点が、あのお母さんの言葉なのかなあ。

グライナー そう思います。お酒が原因で職を失ってしまったお父さんの代わりに、今度はお母さんが働きはじめます。その時、お母さんは「父さんと母さんは、二人で一つのチームなの」と言うんです。「お互いに大変な時に助け合う。チームってそういうものなのよ」って。

———いい言葉だ。

グライナー お母さんのこの言葉が大地の気持ちを動かし、大地の心の変化がパートナーの純の心を動かして行く。卓球部の男子ばかりではなく女子部の心も動かして行く。大切なことが書かれています。

———佐古岡くんが感想文を書いた「バンクーバーの朝日」、読みましたよ。これも、とてもよかった。

佐古岡 以前、テレビで、太平洋戦争中に日系移民が収容所に入れられたことを記録する番組を見ていたので「バンクーバー朝日軍」の名前は知っていました。今回、映画化に伴いノベライズ本が出たので、それを感想文に選びました。野球部なので、野球関係の本はよく読みます。

———佐古岡くんは感想文で、本を読み終わった時、「こんなことがあったんだ」と「今に通じる野球の仕方だ」の二つの驚きを書いてますね。これ、私も全く同感です。

2ページ目へ続きます

京極読書新聞は 毎月1日発行です。



1 ページ目からの続きです

佐古岡 日系移民への差別の話には悲しい気持ちになります。なぜいつの時代もこういうことがあるんだろう、どうしてなくならないんだろうと思います。低賃金、長時間重労働の世界からなかなか這い上がることができない移民たちにとって、数少ない希望である日系人の野球チーム「バンクーバー朝日」。その試合にまで、白人審判の意図的な誤審（明らかなボールをストライク判定）や、白人ピッチャーの意図的なデッドボールなど、ひどいことがいっぱい起こります。

———そういう差別・偏見をフェアプレーで返して行くところが、「バンクーバー朝日」の新しい野球スタイルなんです。

佐古岡 デッドボールを避けようとして、たまたま出したバットに当たったのがきっかけで、「バンクーバー朝日」のその後の攻撃スタイル、バント～エンドラン～盗塁などの現代でも通用するような戦術が生まれてきたといったところはおもしろかったです。

———映画（ノベライズ本）とはちょっと感じがちがうんだけど、テッド・Y・フルモトが書いた「バンクーバー朝日」という本もとてもおもしろかったです。こっちは、バンクーバー朝日の戦術面が詳しく描かれていて、野球部の人にはいろいろなアイデアをくれる本かもしれない。

佐古岡 僕たちは、とても恵まれているんだなと思います。いろいろな意味で。だからこそ、僕は、今やっている野球を大切に、楽しんでいけたらいいなと思います。

———そうですね。「大切」の言葉がもうひとつ出たところで、インタビュー時間が終わってしまいました。最後に、最近読んだ本でおもしろい本はありましたか。

グライナー 「思い出のマーニー」がおもしろかったです。

———ああ、「マーニー」。おじさんも若い頃から大好きな本です。そういえば、あれも「チームふたり」だね。



佐古岡駿くん  
「バンクーバーの朝日」  
西山繭子／著  
(マガジンハウス, 2014)

グライナー オリビア 咲さん  
「チームふたり」  
吉野万理子／作  
(学研, 2007)

## 「夢をかなえるゾウ」

### 田村 暢熙くん(1年), 新谷 保人(湧学館司書)

新谷 中学校の新しい生活に慣れましたか。

田村 教科毎に先生が変わるのがおもしろい。いろいろな興味が湧いてきます。

新谷 今日はね、小学6年生が「夢をかなえるゾウ」で読書感想文を書いたというのが痛快でね、会えるのを楽しみにしてきました。

田村 自分は鉄拳のパラパラマンガが大好きで、それで、鉄拳のイラストが入っている本「それでも僕は夢を見る」を読みました。絵目的だったんですが、水野敬也さんの文章が良かったので、水野さんの「夢をかなえるゾウ」も読んだんです。

新谷 なるほどね。鉄拳つながりなんだ。私は、一昨年の「京中生インタビュー」で2年生の女の子がこの「夢をかなえるゾウ2」の読書感想文で入賞してね、それで初めて手にとりました。ひょうきんなイラストと書かれている内容のアンバランスが魅力でね、一昨年いちばんの収穫でした。

田村 ダメダメな主人公の前に、ある日突然現れた神様ガネーシャ。ゾウの姿をして関西弁をしゃべる、とてつもなくうさん臭いこの神様は、ナポレオンやアインシュタインを育てあげたと言っています。しかし、その教えは「くつをみがく」とか「コンビニで募金する」とか、誰でもできるようなものなのです。こんな簡単なことで、はたして主人公は夢を持てるのかという本です。

新谷 哲学や倫理学の本格的な命題を、ど突き漫才のノリでやるという、とんでもない本です。でも、それよりびっくりしたのは、このガネーシャの教えを実際にやってみた小学6年生がいたということです。

田村 自分は、この本からたくさんことを学びました。毎日一つ課題をガネーシャが出すのですが、その課題がとてもおもしろくて、一番自分が気に入っている課題が「トイレをそうじする」です。

新谷 ああ、そういう課題、ありましたね。

田村 自分は、トイレそうじではなくて、部屋そうじをしてみました。すると学校へ行くと、机の中がきたなかったのきれいにしたくなりました。ほかに、ロッカーの中もきれいにしたくなりました。

新谷 すごい。

田村 神様ガネーシャは、これがねらいだったんじゃないでしょうか。できるかもしれないけど、めんどくさいからやらないことをやらせ、次につながるようにしむけ、夢に近づけたんじゃないでしょうか。

新谷 いや、すごいよ。こういう田村くんの変化に、誰か、友だちとか先生とか気づいた人っているんでしょうか。

田村 誰も気がつかなかったと思います。

新谷 なんて、もったいない。クラスにこういう友だちがいたら、学校生活が二倍にも三倍にもおもしろくなるのにね。

田村 「夢をかなえるゾウ」は自分のお金で本屋で買ったのですが、部屋に置いてある本を両親が読んで、親もこの本にはまってしまいました。

新谷 ガネーシャの影響力は甚大ですね。私は、「2」に登場する貧乏神の「金無幸子さん」の大ファンです。

田村 最近「3」も出て、ブラックガネーシャの登場で、教えがどんどんきびしくなっていて、本の中にいろんな神様たちがあふれかえっている感じがおもしろいです。





田村暢熙くん  
「夢をかなえるゾウ」  
水野敬也／著  
(飛鳥新社, 2007)

「夢をかなえるゾウ2 ガネーシャと貧乏神」 水野敬也／著 (飛鳥新社, 2012)  
「夢をかなえるゾウ3 ブラックガネーシャの教え」 水野敬也／著 (飛鳥新社, 2014)

インタビューで取り上げられた本は  
湧学館で読むことができます。  
「京極読書新聞」とあわせて  
お楽しみください。



#### 発行

京極町生涯学習センター湧学館  
〒044-0101 京町字京極158番地1  
TEL 0136-42-2700(代表)  
FAX 0136-42-2032  
E-Mail yugakukan@town-kyogoku.jp



ホームページもご覧ください  
<http://lib-kyogoku.cubet.com/>

